2022年2月1日　－　つくり・うたい・ひろめ・つなぎあう　－　第637号

音楽運動

日本音楽協議会　〒101-0061　東京都千代田区神田三崎町３丁目10-15 富士ビル505号室　発行人　松本敏之
TEL 03-3221-1821　FAX 03-6369-3057　URL http://nichionkyou.org　Email nichion@yomogi.or.jp

みんなが笑顔になりますように！第13回 笑顔笑顔のクリスマスコンサート

沖音協メンバーが事務局を担い、表記のコンサートを、昨年12月16日に開催しました。例年パレットくもじ前のクリスマス広場で開催していますが改築中のため今回は県民広場で開催しました。

第６回から沖音協が事務局を担い、出演バンドを募集し実行委員会を結成し、那覇市の後援と那覇市職労等の協賛団体を募集するやり方に変えて継続しています。

コンサートは、①各出演団体の活動発表の場を作る。②地域を活性化させる。③市民・県民からカンパを集め、必要な人に笑顔を届ける。という３つの目的があります。

今回も毎年参加している団体に呼びかけを行い、コロナ禍で練習が出来ず参加できない団体もありましたが、沖音協に加入している「沖音協」「ｍ＆ｍ」「よしもとけんじ」および「アフター５」「アーケン」「音海（おとみ）」「奥濱定彦」の計７バンドが参加しました。コロナ感染症防止対策を行うことに注意して、開催しました。

ここ２年は首里城復興支援としてカンパを呼びかけしましたが、今回は、那覇市社会福祉協議会と連携し、歳末助け合いカンパの呼びかけを行うこととし、各バンドの入れ替えの時間を利用して、歳末助け合い募金のボランティアに協力している各団体に、市民に募金の呼びかけをお願いしました。多くの皆様の協力のもと、今回も成功することができました。感謝申し上げます。にふぇーでーびる。

継続は力です。今回は、那覇市社会福祉協議会と連携しましたが、連携する団体を増やすことにより、ネットワークが広がりますし、いろいろなアイデアが浮かんできます。次回は、さらに参加団体を増やして開催したい。コロナんかい負きらんぐとぅマジュンちばらなやーさい。

（平良　昌史）

沖音協

アーケン＆トミー

よしもとけんじ

歳末助け合い募金のボランティアに協力している各団体の皆さん

2022日音協セミナー＆若い会員の交流会は、6月3日～5日に延期

詳細は次号

たかが歌されと歌②

小島　力

３年ほど前（編集部注※１９９４年頃）のことですが、ピアノ曲のつもりで書いた曲がありました。その当時、メロディにはやたらと♯がでてくるのに、転調の感じがまったくないことに、少し首をひねっていたことはいたのです。私の曲作りはメロディ先行型なので、後からコードをつける方式になるのですが、転調の気配がないことからその♯は無視して、Ｄ７やＥ７でごまかして済ましていました。この頃になって、孫のピアノ練習用にと楽譜を整理してみて、再びこの♯がひっかかってきました。気をつけてみると、根音の下の音だけが決まって♯する。これは何かあるぞと思って調べてみて、初めてｍａｊ７にぶつかった。何のことはない。ｍａｊ７を基礎として成り立つ曲を作っておきながら、３年もの間ｍａｊ７の存在をまったく知らずにいたというお粗末。自らの音楽的無知をさらけ出したこの経過は、私と音楽とのかかわりを象徴する事件だったのかも知れません。

太平洋戦争のさ中、東京空襲の直前に福島の田舎へ疎開して、そのまま居着くことになりました。山村の小学校では、入学式も卒業式も足踏みのオルガンで間に合わせるので、講堂のピアノはいつもカバーがかぶせられたままでした。ところがある時そのピアノのふたが開かれました。ある和音を組み合わせて鍵盤を叩くと、Ｂ29（米軍の大型爆撃機）や艦載機、あるいは日本の単発戦闘機の爆音になるのです。全校生徒が避難の目安として、その音を覚えさせられました。講堂のピアノが使われたのは、後にも先にもその時の一回だけです。楽器が本来の機能を閉ざされ、武器の一環としてのみ存在が許される時代でした。

戦後そのピアノが開放され、音楽の先生が時々練習をするようになりました。放課後教室に居残って、音楽室から流れてくる音色に、いつまでも聞きほれていました。幼かった私が、戦後の開放感を肌で実感したひとときでした。しかし私自身が楽器にふれることなど思いもよらぬ程、物資が不足した戦後の混乱期です。やがて私の主たる関心は、その後出回り始めた本に向けられ、むさぼるように読書に没頭します。「あいつの将来は文学者だろう。」そう言った担任の言葉がそのまま私のあだ名になるのですが、残念ながらその文学者としての将来たるや、県史の片隅に詩人として登録されるだけにとどまり、以降曲がりくねった自分史をたどることとなります。

食糧事情を含めた戦後の貧しさの中で、紆余曲折の結果郵便局に就職することとなり、やがて労働運動にのめりこみます。青年部時代は一貫して文化担当でした。うたごえ運動全盛の時代で、いい曲も沢山あったのですが、お仕着せの歌を与えられることに反発。「労働者の音楽は労働者自らが生み出さなければ」という目的意識だけで、曲作りを始めました。向こう見ずな論法ではありましたが、日音協の発足を下から支える受け皿であったのかも知れません。

手元に楽器もなくまっとうな音楽教育も受けていない人間にとって、作曲は頭に記憶したメロディーを、口で歌って採譜してもらう以外方法はなかった。そうやってできた曲が、たまたま募集していた「全逓の創作曲」に入選してしまったのですが、その余力で構成詩の挿入曲など数曲を書いたものの、再び労働運動・社会運動に没頭する時期に入ってしまいました。

やがて全逓の内部でも音楽運動の興盛期を迎え、福島地区内でも運動の組織化を進める、と言う名目で、再び音楽の場に引き出されることとなります。全国組織としての全逓音協結成にも参画し、初代会長として小島・天羽（現日音協事務局長）コンビで、10年の歴史を作ることができました。興隆期の運動というものは、環境としてのまわりの支えが大きく、特段に苦労は多いものの、かえってくる喜びはそれに倍するものがあります。運動の中で接する全国各地の若い活動家とのふれあいも、音楽を通じてのみ味わうことのできる、深い絆を感ぜざるを得ません。いい時期にいい立場に立たせてもらったと、今しみじみ振り返っているところです。会長辞任の際贈られた、全国の活動家の寄せ書きでびっしり埋まった檄布は、何よりも大きな記念のあかしです。

日音協福島県支部の運動も、住んでいる地域が原発銀座といわれる福島県浜通りであるため、「反原発」を中心にすえた創作活動を進めてきました。招かれた多くの講座やブロック合宿などでも、音楽を愛する沢山の仲間たちと知り合うことができました。一本指で鍵盤を叩いて楽譜を書く状況に変わりはないのですが、何曲かが「うたのひろば」掲載曲に採用されたことも、望外の喜びと言わなければなりません。

会長引退後数年で、退職の時期を迎えます。村公民館が主催するコーラス教室の指導も、10年余りの長きにわたりましたが、郵便局退職を機に引退することとしました。全逓福島地区音協が開いてくれた送別会には、天羽事務局長を始め二代目の菊池全逓音協会長など東北各地のメンバーが、懐かしい顔をそろえてくれ、感激を新たにしたものです。わざわざかけつけてくれた皆さんへの感謝の念と共に、音楽運動を通じて生まれるこの絆の強さは一体何だろうかと、改めて考えない訳にはいきません。私の長い運動歴も、音楽を通して結びつく多くの仲間たちの絆に、支えられてこそのことだったと今にして思うのです。

退職直前に始めたパソコンによる作曲は、楽器も弾けない、歌すらまともにはうたえない私にとって、それが唯一の表現手段なのだと言えるかも知れません。

これまで旅行自体を目的とした旅行など、ほとんどやったことのなかった私は、退職記念の意味もあって、家内共々北海道を訪れました。オートキャンプ場をハシゴするなどしながら、ほぼ一ヶ月をかけて道東道北をまわり、念願の羅臼岳や大雪の山々にも登ることができました。その時の記録ビデオの挿入曲として、12曲のＢＧＭを作曲したのがひとつのピークであったかも知れません。足腰にガタがこない内にと言う、なかば追われるような気分もあって、昨年は以前登り残した大

雪山系最奥のトムラウシ、そして南八甲田・櫛ガ峰などにも出かけました。当分の間こうした山旅のビデオの、BGM作りをメーンとした、音楽とのつきあいが続くことでしょう。今の私の技量では、さほど上位のソフトはこなせる筈もなく、当分「ミュージ郎iv」や「Ballade」で間に合いそうです。

現職を退くと、日音協とも縁遠くなる感なきにしもあらず。しかし孫たちが「あぐふぇ」の一員として「はたらくものの音楽祭」の舞台に立っている姿を見ると、連綿として続くものは続いて行くんだという感慨を、今更ながら深めています。とは言え私自身も折にふれ、日音協運動を肌で感じる機会を、できるだけ多く持ち続けていかねばと、改めて考えているところです。

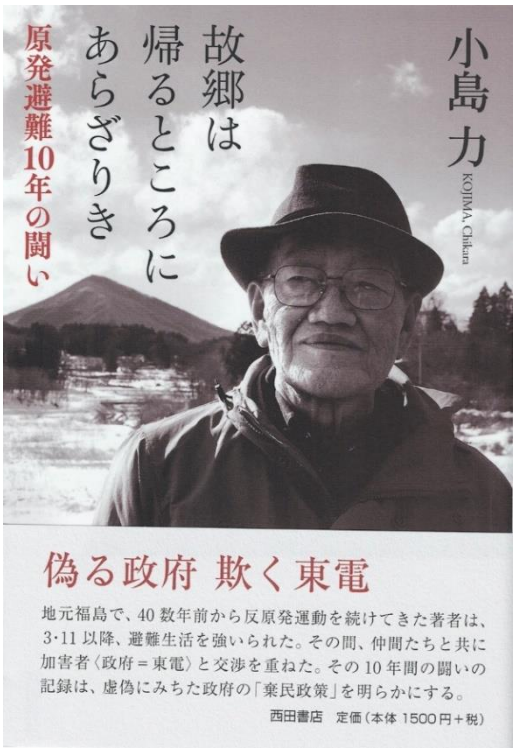
小島力さんが出版

父であり福島県支部会員である小島力が、昨年10月15日に『ふるさとは帰るところにあらざりき』というタイトルで本を出版致しました。

父は昨年の5月、この本の最後の校正を終える寸前で病に倒れ、装丁その他は私と出版社が相談しながらなんとか出版に漕ぎ着けた次第です。戦争と原発に翻弄され続けた父の、いわば老犬の最後の遠吠えともいえる著作ですが、皆様の手に取られ、ついては脱原発の一助となれば、親娘ともども幸いです。

著作には日音協に関する記述も多く、早々に読んでくださった市野宗彦さんから、感想を送って頂きましたので、書評に替えて以下に掲載させて頂きます。

また、「感想と共に」と日音協の記述に関するいくつかの間違いもご指摘をいただきました。すでに出版し書店に出回ってしまった著作に対しては、正誤表を挟むことはかないませんが、日音協会員の皆様と機関紙読者の皆様には、この紙面をお借りし、市野さんのご指摘に沿って添付表の通り訂正させて頂きますので、本書をお買い求めいただいた際には、是非ご参照ください。



市野宗彦さんから頂いた感想

触発される本や、引き込まれる本を読んでいると、本の半ばを過ぎた頃、残りのページ数をつい確かめたくなります。早く読み進みたいという気持と、終わるのがもったいないなあという気持が錯綜するのですね。小島力さんの『故郷は帰るところにあらざりき』は、まさしくそういう本でした。

不気味な地鳴りに始まる、この10年の記録の中で、いちばん重く、鋭く迫ってくるのは、やはり、国・東電・行政に立ち向かう小島さんの姿です。ぶれない、勇気があるというだけでなく、たくさんのごまかしの言説をかきわけて、ことの本質をつかみ、的確に表現する小島さんに圧倒される思いがしました。

小島さんが長年、労働運動や地域の運動でつちかった経験やネットワークをもとに、穏やかに、粘り強く人々を組織していく様子もよく分かりました。それを支えているのは、やはり小島さんのお人柄ですね。地震が起きたとき、すぐには原発に思い至らなかったことをごまかさず、これまでの自分の反原発運動は本物だったのかと自責し、あわただしい避難の中、ダイをおきざりにしたことを悔やみ、住民説明会で政府を厳しく批判した後、政府の姿勢がまったく揺るがないことに気付き、「私は何に向かって吠えていたのだろうか」と暗澹たる気持になる、たえず、こうした自省、後悔、反省を繰り返してきたことが、前向きで、柔軟で、味わい深い小島さんのお人柄をつくりあげてきたのでしょう。

そして文章のこと。余計な虚飾を加えず、淡々と書いているのがいいですね。解説の秋沢氏が「こうした文章は生半可な態度や姿勢からは決して生まれず、確たる思想がなければ書けないものだ」と述べているのに心から共感しました。ことを針小棒大に描いたり、自慢を紛れこませたり、美化したりすると、その品格のなさは自ずと文章ににじみ出てしまうと思いますが、小島さんの文には、そういうものがひとかけらもありませんでした。「文は人なり」とあらためて思いました。

〈購入方法〉
一般書店、Amazonなどのネット販売からも購入できますが、著者売り分を希望される方は下記の通りお申し込みください。
・電話　坂口美日携帯 090-7945-6400（SMSも可）
・葉書、手紙の場合　希望数、送り先を記入し下記住所に坂口美日宛でご郵送ください。
〒178-0063 東京都練馬区東大泉7-50-42 402
・本の発送と共に、振り込み口座先を請求書に、明記し同封しますので、到着後にご送金ください。

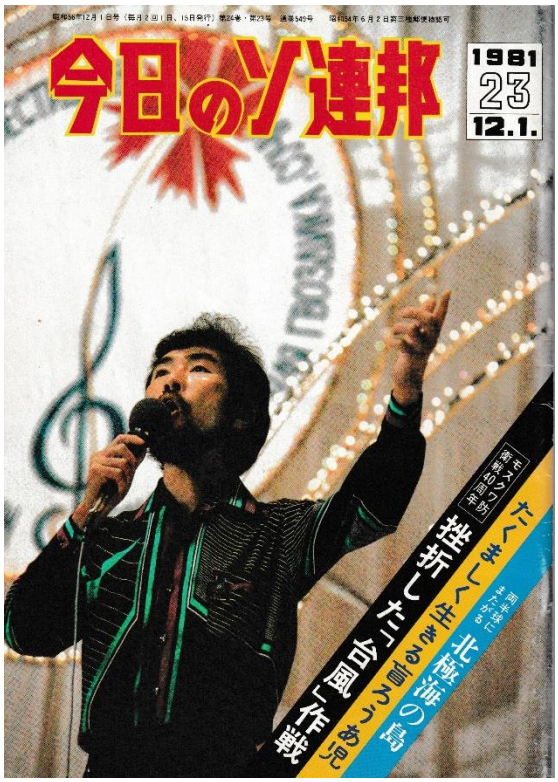
〈著者売り分の価格〉
・著者売り分は、一冊1.400円（定価1.500円）です。
・10冊以上ご注文頂いた場合1冊1.100円とします。

正誤表（下線=訂正箇所）

項	誤	正
P.94 11行～	日本音楽協議会（通称・日音協）は、1965年に結成され、会長に芥川也寸志、事務局長に音大出の若手音楽家印牧真一郎が起用され、	日本音楽協議会（通称・日音協）は、1965年に結成され、会長に芥川也寸志、事務局長に漆崎達郎が起用され
P.94 14行	第1回「はたらくものの音楽祭」は、1968年東京・大田区民会館で開催された。全逓は「全逓歌」「交流会の別れ」を携えて舞台に立ったが	第1回「はたらくものの音楽祭」は、1967年東京・大田体育館で開催された。全逓は「全逓歌」「旅愁」「交流会の別れ」を携えて舞台に立ったが

たかが歌されと歌③

小山 孝



歌にふれて

今から二十数年も前の話である。I君とK君が真剣な顔つきで私を訪ねて来た。

「職場に合唱団を作って、日音協祭典に出演したいのでカを貸して下さい。」

祭典が三月で、この話が来たのが一月だった。「何、バカな事を考えている」と私は一蹴した。それでも彼等は真剣に何度も私の所へ来た。仮に今サークルができたとしても祭典までたかだか二カ月足らずで一体、何ができると云うのか。こんな甘い態度で音楽をすると云う彼等の態度に私は腹を立てていた。つけ焼刃的な練習で人前で歌を唄うという行為は、音楽をも、聴き手をも愚弄すること以外の何ものでもないと私は考えていた。

当時、私は自分の音楽に錯綜していた。高校時代から声楽を学び、卒業後、三年間働き金を貯め、二十一歳で某音大に入った。

しかし学校は金ばかりかかり、貧しい私には苦しいものだった。少しでも多く学びたいと思うあせりから、学校のシステムに反対し学園闘争に入り、二年で退学する羽目になった。

その後は、学校に多額な授業料を払うなら、その金で一流の先生にレッスンを受けようと決め、北川剛さん、滝沢三枝子さん、故芥川也寸志さんに多くの影響を受けた。

芥川さんからは「アマチュアの音楽が高まるということは、より人間的に高まるということだ」等々音楽の真髄にかかわる事を沢山学んだ。もう一方で、日本語を美しく唄いたいという思いから、シャンソンの勉強をするうち、いつの間にか、銀座の「銀巴里」やクラブで唄うようになっていた。

ところが、あれほど唄うことの好きだったのに、唄うことが勤務になってしまったことと、日本人の唄うシャンソンが、蔭花植物を純粋培養させたみたいな芸術家ぶっているところが私にはどうしてもなじめなかった。

もうひとつには、酔客相手に唄うことの屈辱だった。「私は誰の為に唄っているのだろう？」二七歳でその世界を退めた。四年間であった。しかし金をもらって唄うことの厳しさも嫌というほど同時に知った。

そんな時期のところへの職場の仲間の働きかけであった。私は二人の熱意に推された。

条件を二つ出した。

一、来年の音楽祭に向けて一年間、練習をすること。

二、人生の貴重な時間の中で生きているのだから練習日は、お互いの人生を喰いつぶさない姿勢を忘れないこと。

今から思えば、ずい分生意気な条件を出したものである。こうして毎水曜日、男性九名で練習に入った。歌ははじめて、演歌しか知らないという仲間達だった。職場の仲間は「ゴミ合唱団」と呼んだ。

一年後、祭典で発表し、聴きに来た職場の仲間は、その日から「コール・ドミナス」と呼び、誰もゴミ合唱団と言わなくなった。

こうした経過から、私は日音協と関わり、私の音楽も大きく変わった。中でも大きな影響を与えてくれた一人が藤川ツトムさんであった。ある合宿で出逢い、藤川さんの歌にふれ、その歌の中に労働者の息づきと、そこにこめられた人間愛と命の尊厳をみて、「ああ、私の歌に欠けていたのがこれなんだ」と衝撃をうけた。

この出逢いで知った『僕たちの歌』は後々まで私の心に響き、第六七回世界歌謡祭へ日本の代表で旧ソヴエトへ行き入賞し、審査員特別賞を得た。日本の働く者の創った『僕たちの歌』が世界の人々に評価されたことが何よりも嬉しく、日音協の「つくり、うたい、ひろめ、つなぎあう」ことに大きな誇りを持って帰って来た忘れられない思い出である。

コール・ドミナスと行動することで多くの日音協の作品・作家にふれ、自分の音楽の自信にもつながっていった。

なかでも、日音協で創られた歌の数々が、コンサートで、ステージソングに組めるんだということを示してくれたのが、長野の大沢隆男さんとのジョイント・コンサートであった。全てのプログラムを日音協の歌で組み、同じ働く仲間が演奏し、聴衆を充分に惹きつけるに足りるコンサートを成功させたことである。もちろん、実行委員会の周到なディスカッションと、準備の賜である。

このコンサートで得た自信は大きい。また、日音協にはすばらしい歌が沢山あることを知った。それらの数々を心をこめ、ていねいに唄い、演奏することの大切さも知った。

広島、青森をはじめ、全国各地から声がかかり唄うことが増えた。働く者の創ったすばらしい歌の数々をもっともっと知ってほしい。そのための技術も、演奏力も高めなければならないだろう。いやもっと高い思想性を身につけなければならないのかも知れない。

若い頃から、何の取り得もない私が歌にふれて「歌がもう一つの命」と生意気にも考えてきた私には「たかが歌　されど歌」とは思いにくい。だが「されど日音協」である。

その思いを強くしたのが富

（5面につづく）

インターネット企画【歌を創るということ】

今回のインタビューは、『いなのとひら・のとこば』（9月開催予定の第 53 回はたらくものの音楽祭にゲスト出演が決定）リーダーの稲野真人さんです。

以下にインタビュー結果をダイジェストにまとめました。詳しくは、日音協ホームページからご視聴ください。25分43秒です。　（坂口美日）

http://nichionkyou.org/

【インタビューの概要】

小学校の時は、音楽が嫌いだった。

中学生になって、ビートルズ、キャロルなどを聴くようになり音楽が面白いと感じるようになった。

中学２年の誕生日に、始めてギターを手にしたのはクラッシックギターだった。

エレキより、生ギター（アコギ）が凄いと思った。

伊勢正三のようになりたくてギターを弾くうちに、自分で歌も創るようになった。が、小学校の音楽の授業のトラウマか、大人になってもしばらくの間は人前で歌う気にはなれなかった。

30 歳を過ぎて、止む得ない事情から人前で自分の歌を自分で歌うようになった。

そうしてライブ活動を続ける中で、ひらの、こばとの出会いがあり、中川五郎さんのライブに出演したのをきっかけに「いなのとひら・のとこば」というバンドネームが誕生し、現在に至る。

歌を創る時に大事にしたいのは「言葉」。集会にも来ないような人が「クスリ」と笑ったり「お、そうか」と思ってくれたり、もっと身近なレベルで考えてもらえるような歌づくりをしてきたし、これからも目指したい。

日音協はまだまだ無名。知ってもらうことは大事。存在の確立を。

（4面からつづく）

山からゲストの依頼があった時のことである。

列車が長野駅で大半の乗客が入れ替わり、私の周りにドヤドヤと陣取った二十人位のグループは見るからに芸能人と見えた。松任谷由美のスタッフだと会話から知った。全国ツアーの途中らしい。

「静岡は客のノリが悪い、あそこは文化の谷間だ。」「東京の客は何を考えているのか分からない。」「長野はいまいち。名古屋は最高だぜ。」

この会話に私は怒りをおぼえていた。

「静岡も東京も長野も、テメエ等の音楽に満足しねえんだ！」と叫びたい心を呑み込んだ。しかし時間が経ってみれば彼等のこの程度の意識の音楽に怒ることの愚かさも知った。これから歌う私の曲の数々を目の前にして、今の社会の中で屈辱的に労働させられている現実の中でも、それに屈することなく前向きに生きている姿が詩・曲の中からみえてくる。何と誇り高い歌を私達は持っているのだろう。私の心に熱いものが溢れてくる思いは今も忘れない。

スタンダード靴労組は過去に二度の大量首切りの闘いを経験した。その闘いの中で何度か歌声集会を開いた。社宅のこども達も参加し、そのこども達が共感した歌が、今村一男さんの『座り込めここへ』、小玉貞三さんの『たとえば俺たち』、藤川ツトムさんの『今、俺達の行く道は』等々だった。驚きであった。私達が私達の心で感動できる歌はこども達とも同じであったことだ。

真実をありのままに表現すること。このことを日音協は三十年の中で培ってきた。この貴重な財産はこれからも引き継がれるだろうし、継がせたい。「たかが歌　されど歌」「たかが日音協　されど日音協」などとは言い難い誇りがいっぱい積み重なった歴史である。

（小山孝さんは、２００４年３月22日、逝去なされました。）

（たかが唄 されど歌②と③については、誤植なども見られますが、当時の表記のまま掲載いたしました。）

※編集部

歌を創るということ（企画担当から）

演奏動画は、稲野さんの YouTube チャンネルから、選んだものを、稲野さんの許可を得て日音協チャンネルに再 UP しました。

演奏動画は、「みんなの唄」「内閣総理大臣」「うそつき～喜多方無観客限定公開配信ライブより」「蔓延防止等重点措置」「まゆみといな・のとかしゅ 」 の４本です。

YouTube 再生リストの URL はこちらです。

https://www.youtube.com/playlist?list=PLdFbsK7Yv1AJCyBlWb6nlEpburzErrKtF

歌の力が物語るもの 103

茱萸坂うた行動 12／24（434回）報告 Rico

【参加者】上野さん、スーさん、坂口、達哉、森　計5名

今日はクリスマス・イブ。乗り換えの新宿駅構内はいつもより混雑していた。けれど国会議事堂前の駅を出ると閑散…。しかし、妙法寺さんの歌うような『南無妙法蓮華経』の響きにほっこりする。唱え続ける宗教者がいて、歌い続ける私たちがいる。

旗を立てていると、ウクレレを持って上野さんが現れた。「お、来られたんだ。繋がなくちゃと思って来たんだよ。」と。腰に不安があって、代わってもらえる人はいないかとMLで呼びかけたのを見て、来てくださったのだ。上野さんは誰も来られなそうなときにふっと助けに来てくれる。なかなか会えないけれど、気にしてくれているのが嬉しい。

『あたりまえの地球』『風車の唄』…と、3人で歌い始め、次に現れたのは坂口さん。介護休暇で福島に帰っていたのだが、クリスマスを家族と過ごすために戻ってきて、茱萸坂にまで足を延ばしてくれた。そしてスーさんも登場。夕方からの官邸前や経産省前の行動をまわってきたのだという。山下達郎のクリスマスソングの替え歌を口ずさんでいたけど、まだ未完なのだそうだ。『怒りのこぶしを上げよう』は、今日は3番まであった。

クリスマスだから讃美歌を。『あなたに届けと』『子どもらの明日のために』、そして『茱萸坂賛歌』『茱萸坂の祈り』。いずれも上野作品。上野さんからのリクエストで坂口さんが『むらさきつゆくさのうた』を歌った。この歌も久しぶり。

いつもの親子連れが通りかかる。妹ちゃんがサンタの帽子でみんなにお煎餅を振る舞ってくれた。お兄ちゃんも久々に一緒の参加のようだ。もう中学生、少し離れてシャイな感じで見ている。以前はお兄ちゃんがお菓子を配ってくれていたことを思い出す。

気が付くと終了の時間が近づいている。「沖縄を歌おう」というと、上野さんのファイルに『辺野古ブルース』が。調査の杭が打ち込まれたころに作られた歌だ。三線の音色が似合いそうなメロディ。ひとも歌も、久しぶりの再会がいっぱい。

最後は『原子力発電NO！』。これで2021年の歌い納め。コロナで途切れ途切れになってしまったけれど、434回を歌ってきた。2022年も歌おう。私たちが諦めていないことを示すために。

2021年12月21日のユーチューブの動画から

水道橋だより

▼東京のコロナ感染者数急増のため1月14日から、茱萸坂うた行動は休止しています。▼ちなみに休止を決断した1月13日は3124人、翌1月14日は4051人でした。今振り返ると『少ないなあ』と思ってしまうほど、大きな数字に慣らされています。怖ろしい。▼第3金曜日に官邸前で行われる『原発いらない金曜行動』だけは歌で参加しています。反原発うたいたい単独の茱萸坂うた行動はもうしばらくお休みです。（東京・森）

▼年明け当初は1ケタ台だった青森県のコロナ感染者もあれよあれよという勢いで増え、400人台へ迫っています。症状が軽いと言われるオミクロン株ですが、感染した家庭の状況を聞けば、軽く侮ってはならないなと思います。▼1月28日に予定していた青森県支部の総会も29日の岩手県支部の総会も「書面決議」という形になりました。29日の長野県支部の新年ライブも延期となったそうです。▼1月15日に開催した第3回幹事会（ZOOM）では、2022日音協セミナー＆若い会員の交流会も6月頃に延期するということで、会場・講師・宿の再手配をすることにしました。▼ということで、音楽運動の記事にと予定していた原稿が見込めなくなり、編集者とすれば苦労しております。▼テレビ番組などで最近よくやられるアーカイブス的な編集になるかもしれませんが、内容的には充実した中味にしたいと思っています。▼ぜひ日音協のホームページにもお立ち寄りください。（佐藤）

どん行

（151）

飯島貞親

▼100円ショップを覗くとなぜこんな価格で売れるのかと疑問がわく。なんでも、40年もの間100円のままなのは日本だけだそうだ。海外では、原材料高騰により200円～300円と値上げしている。日本人の労働力では100円という価格を維持できる水準なのか。40年も100円であることは異常事態ではないだろうか。▼日本では、バブル崩壊後20年以上に渡って物価が上昇せず、賃金も上昇しない景気低迷の状態が続いている。20年以上も労働者の賃金が上昇していない国が果たして先進国と言えるのだろうか。今の労働環境が壊されることが嫌なだけで、組合や企業が自分たちの労働環境を維持させてくれればよいと考えているのだろうか。▼日本でデフレがこれだけ続くのは、販売価格を引き上げないことが企業努力のように思われているところがある。そのしわ寄せが人件費にきている。そのことが、労働賃金が上がらない要因にもなっている。つまり、価格競争でしか企業が生き残れない産業構造になっているのである。▼物価上昇は景気上昇局面では必ず起こることだが、「賃金上昇は企業の努力が必要だ」ということは日本だけなのだろうか。